

## リカバリーの視点から地域で暮らす精神障害者の就労への思いの検討

A study of Thoughts to Working of People with Mental Disorder Living in Community  
from the Viewpoint of Recover笹木 弘美  
Hiromi Sasaki

## Abstract

This study aimed to research views point of work people with mental disorder living in community from the viewpoint of recovery. Three people from one employment support service in 'X' city participated in this study. Data was collected from the semi-structured interviews of the participants. By examining their thoughts on work, six categories were found such as 【Painful past caused by illness】, 【Existence of others that gives a feeling of protection】, 【Finding of recovery】, 【Working as a new challenge】, 【Hesitation toward working】 and 【Expectation of their own possibility】.

The result indicated that their thoughts of work were influence by the existence of others. Therefore it can be considered that their identity was enhanced through their interaction with others and this lead them to recovery. In conclusion, rather than our intervening in their way of living, it may be better for them to support the process of recovery by considering their illness and disorder.

## I はじめに

Recovery (以降, リカバリーと表記) とは, 1980 年代アメリカを中心とした当事者の手記に端を発し, 登場した概念である<sup>(1, 2)</sup>. 従来の医学モデルを中心とした生物学的, 医学的な回復を超えて, 当事者本人がどう生きるかという実存的な問いに始まり, 人生を創造的に生きることを目指した運動である. 日本においてもリカバリー概念が導入され, 精神保健福祉領域の関係者, 当事者間で広がりを見せている<sup>(3)</sup>. 近年, 精神障害者の地域生活に関連するリカバリー活動・実践が報告されるようになり, 他にもリカバリーに関連した社会参加プログラム作りも進められるようになったが, 途についたばかりである. また, 政策的にも精神障害者の地域移行が積極的に行われ, 退院支援から地域定着支援へと展開されている. 特に, 就労に関して施行的なモデル事業が行われ, 地域における就労支援が模索されるようになってきた. 平成 28 年度の障害者雇用促進法改正に伴い, 精神障害者が雇用率の算定基礎の対象になったこともあり, 雇用状況は

年々増加の一途をたどり, 民間企業の雇用者数は平成 22 年に 9.9 千人だったが<sup>(4)</sup>, 平成 24 年に 16.6 千人<sup>(5)</sup>, 平成 27 年では 34.6 千人<sup>(6)</sup>と, 多くの精神障害者が社会の中で働くことができるようになった. 雇用者数という量的な指標のみならず, リカバリーの観点からも促進要因として就労の関与について報告<sup>(7, 8)</sup>されているが, 障害者にとっての就労の意味や就労とリカバリーの検討となると限られている. また, 精神看護領域では, リカバリーの視点ではないが, 精神障害者の地域生活に関連して, 作業所利用者の生きがい度の検討<sup>(9)</sup>, 統合失調症患者の生活技能と自尊感情との関連<sup>(10)</sup>や慢性統合失調症患者のストレス対応能力の検討<sup>(11)</sup>など, 日常生活の自立を促す働きかけや社会生活技能の向上の実践が報告されている. しかし, これらの研究では, 特定の技能や能力を測り, 劣っている側面を数量的に捉えるといった能力査定との報告が中心であり, リカバリーや当事者の就労に関する質的研究や実践報告は少ない. 保健師が地域の第一線で活躍していた時代にあっては, 地域で暮らす精神障害者

の生活や働く場への支援が行われていた<sup>(12)</sup>。しかし、その貴重な実践は資料としてはあまり残っていない。前述したように、地域生活への移行、障害者が働くことが当たり前の時代になりつつある今、医療者や看護者は精神障害者の就労や働くことの意味や生きにくさを理解した上で、その人らしく生きるための支援が必要である。

そこで、本研究では精神障害者の人々が働くことについて、どのような思いをもっているのかをリカバリーの観点から検討することを目的とする。

## II 研究方法

### 1. 研究デザイン

本研究では当事者の語りをデータとし、就労への思いについて、リカバリーの観点から検討することから質的記述的研究とする。

### 2. 研究対象者

A市内の就労移行支援事業所1箇所に通所している精神障害者を対象とした。

### 3. データ収集

1) データ収集期間：2016年3月～2016年6月である。

2) データ収集方法

本研究は半構成式のインタビュー形式とし、プライバシーが確保できる場所で行った。インタビューはICレコーダーに録音した。インタビュー回数は、1名につき1回、もしくは2回とした。1回のインタビュー時間は平均して40分であった。

3) インタビューガイド

(1) 個人の属性

年齢、入院通院歴、生活形態

(2) 過去の体験：①発病前はいつ、どこで、何をしていたのか、当事者の価値観、信条など、②今までどのような仕事についていたのか、そのときの仕事内容と仕事に対する思いや考え、③家族や周囲の人との関係など

(3) 現在の状況：①どのような思いで病気を受け止めているのか、②事業所を利用することの思い、③自分自身や他の人の存在、生き方の変化、希望や夢、働くことのへの意識など

## 4. 分析方法

本研究の目的から就労への思いに関する語りをデータとし、リカバリーの視点から分析した。また、リカバリーの統一的な定義はないが、本研究では、野中が示す<sup>(13,14)</sup>、「どのような病や障害に圧倒されたとしても、自分らしさや日常生活、そして自分の人生を取り戻すことができる」という考え方に準拠している。

分析の手順はまず、インタビューから逐語録を作成し、それを熟読した後に、対象者の就労への思いの語りを上記のリカバリーの視点から読み解き、意味内容を捉えながら分析、段落単位を抽出したものをコード化した。次に抽出したコードの意味内容を保ち、類似するものをサブカテゴリーとし、さらに抽象度を上げカテゴリーまで分類した。最後にカテゴリー間の関係性について検討した。また、分析の過程において、精神看護学領域の看護教育研究者と共にそのデータ、および抽出されたサブカテゴリー、およびカテゴリーを提示し、確認、検討、修正しながら信頼性の確保につとめた。

## 5. 倫理上の配慮

本研究は北海道科学大学倫理審査委員会の承認を得た上で実施した。研究対象者には、研究の目的、意義、協力依頼内容等を文書と口頭で説明し、書面で同意を得た。また研究に協力しない場合にも不利益を受けないこと、協力を同意した場合であってもいつでも取りやめることができること、協力を取りやめても不利益を受けない事、インタビューで答えたくない質問には答える必要はないことを説明した。また、対象者が通所している施設の代表者、及び管理者に研究の目的を文書、及び口頭で説明し、了解を得た上でインタビューを実施した。さらに、収集したデータの運用を慎重に行ない、守秘義務を遵守すること。研究終了後には、個人情報記載されている紙媒体についてはシュレッダーで裁断の上、廃棄すること。また、電子媒体に個人情報を保存している場合には、研究終了後、一定期間経過後に粉碎・破棄する。さらに、研究成果は、匿名性を十分確保した上で、学会発表などで報告することとした。

## 6. 対象者が通所している就労移行支援事業

就労移行支援事業とは就労を希望する65歳未満の障害者で通常の事業所に雇用されることが可能と見

込まれる者に対して、①生産活動、職場体験等の活動の機会の提供その他の就労に必要な知識及び能力の向上のために必要な訓練、②求職活動に関する支援、③その適正に応じた職場の開拓、④就職後における職場の定着のために必要な相談等の支援を行う。利用期間は2年間<sup>(15)</sup>。

### Ⅲ 研究結果

#### 1. 対象者の概要

対象の選定は、施設側からの助言を得て、通所者全体への説明を行った後に、個別に依頼し、了解を得た3名の通所者とした。対象者の障害はパニック障害、うつ病性障害、不明で3名とも男性であった。年齢構成は年齢が10代1名、40代2名であった。事例Aは一般就労の経験はなく、今回通所している事業所が初めての就労であり、賃金を得る体験も初めてであった。事例BとCについては過去に一般就労の経験がある(表1)。

#### 2. 就労とリカバリーの関連

事例の聞き取ったデータをその意味内容からコード化し、類似するコードからサブカテゴリー、さらにはカテゴリーを抽出した。サブカテゴリーは《 》、カテゴリーは【 】で表示する。また、サブカテゴリーの対象者の代表的な語りを「 」で示す。

##### 1) 抽出されたサブカテゴリー数とカテゴリー数

事例A、B、Cの3名のインタビューの分析結果は、66のコード、16のサブカテゴリー、さらに6のカテゴリーが抽出された(表2)。

##### (1) カテゴリー1【病いに翻弄された過去】

このカテゴリーは《破綻した生活への苦悩》《歯車が合わない事態に翻弄する》《無理解な親への苦悩》の3つのサブカテゴリーから構成されている。発病時に仕事を失ったり、家族の信頼を失ったり、自分のことをわかってもらえない家族の無理解に苦慮するなど、それまでの生活が一変するなかで、病気を抱えて生きていかなければならない苦悩を表している。

##### 《破綻した生活への苦悩》

「ノルマとかそういうのがあって、やっぱりみなさん、働けば嫌なことが色々あると思うんですけども、そういうストレスでちょっとあの…むちゃくちゃで、心身を崩してしまっただけで、発病によって心身ともに不調となり、健康なときのような仕事ができなくなったことの辛さや苦悩についての語りである。

##### 《歯車が合わない事態に翻弄する》

「辛いなと思って辛くなったら、ほんとにもう坂を転げ落ちるように一気に全部ダメになっちゃって、で、仕事できなくなって、仕事できなくなったからまた周りの評価も下がって”あいつはほんとに仕事も出来ないし周りの人間のことも見えないし、これまでもダメだったのにさらにダメになったじゃん”みたいになって」。発病によって、仕事だけでなく、いろんなものを失い、噛み合わない歯車のような生活や人間関係に翻弄されていく語りである。

##### 《無理解な親への苦悩》

「親がちよつとうつ病に理解がなくて、それであの、うつ病って何だかよくわかっていなくて、自分の子どもだから、自分の子どもは元気で明るくて行動的であってほしいみたいなイメージがあったらしく、それをすごく押しつけられちゃったんですね、最初の1年、それでまた耐えられなくて1回悪くなっちゃって」。病気に対する親の無理解に傷つきどうすることも出来ない苦悩の語りである。

##### (2) カテゴリー2【安心感を得られる他者の存在】

このカテゴリーは《安心できるスタッフの存在》《通じ合える仲間の存在》の2つのサブカテゴリーから構成されている。ここでは、自分を認めてくれるスタッフに安心感を得たり、また同じ精神障害で通所するメンバー同士の交流を通して安心感や信頼を得る体験を表している。

表1 対象者の背景

| 事 例 | 年 齢  | 性 別 | 疾患名    | 入院歴 | 通所期間 | 世帯状況  | 一般就労経験 |
|-----|------|-----|--------|-----|------|-------|--------|
| A   | 10歳代 | 男 性 | 不 明    | な し | 2ヶ月  | 家族と同居 | な し    |
| B   | 40歳代 | 男 性 | パニック障害 | な し | 18ヶ月 | 家族と同居 | あ り    |
| C   | 40歳代 | 男 性 | うつ病性障害 | な し | 6ヶ月  | 家族と同居 | あ り    |

### 《安心できるスタッフの存在》

「安定してるから…、対応も上手いし、さすがだなって思いますよ。そんな人がいるから大丈夫って。だから、そういう面でここに続けてられるっていうんですかね。そういうのあります」。通所する事業所スタッフの力量に安心感を感じ、事業所での過ごしやすい環境や関わりについての語りである。

### 《通じ合える仲間の存在》

「その方がすごくこう…親身になってくれている方で、僕的にはその、ほんとに頼りになるというか、」仲間に感じていることを表している。

### 《回復した感覚を抱く》

「変わったっていう感じは、あまりないですが、変わったっていうよりはやっぱり、生き生きしてた頃に少し戻って来たかなっていう感じですかね」。事業所に通所ことで、健康なときの状態に戻ってきた実感の語りである。

### 《過去を想起しても安定している体調》

「やっぱりあの…調子崩しちゃった仕事ではあるんですけど、すごくやり甲斐とか感じていて、お客さんにもすごく頼りにしていただいて、いい付き合いをさせていただいたので、すごくやっぱり…最近元気になったからっていうのもあるんですけど、前の仕事を思い返すことが出来るようになって、思い出しても大丈夫っていうか」。仕事は辛い体験であったが、病気の回復と過去を冷静に語れることに回復感を感じている。

### (4) カテゴリー4【新たな挑戦としての就労】

このカテゴリーは《働くことの意味づけ》《チャレンジとして就労》《新たなスキル獲得》の3つのサブカテゴリーから構成されている。これらは、過去に病気で仕事を失敗したが、病気がよくなることで、働くことにチャレンジすることを表している。

### 《働くことの意味づけ》

「働くということは、まず自分の中では、やはり…丁寧さ…あと、報告…「報連相」っていう、そういうメッセージを表す言葉と、あと、自分のことは自分でやる、そういうことの約束を守る、という意味だと思っています。」働くことに自分なりの意味づけをしている語りである。

### 《チャレンジとしての就労》

「えーと、やはり、やったことをすべてやり抜いていこうかな、と思ってますし、もう、もう、…自分も試しにやってみようっていう、そういう意味で今、頑張っ

いい意味で母性を感じさせるといって…優しくこう包んでくれるような方がいて、その方もちょっと精神的には大きかったですね」。通所しているメンバー同士の交流が深まることでお互いの信頼関係や仲間同士で助け合うことの大切さの語りである。

### (3) カテゴリー3【回復の実感】

このカテゴリーは《回復した感覚を抱く》《過去を想起しても安定している体調》の2つのサブカテゴリーから構成されている。病気になったが、時間の経過や事業所通所によって自らの回復の感覚や健康感を「てます」。働くことへのチャレンジを試みようとする語りである。

### 《新たなスキル獲得》

「これまではやってなかった…なんていうんですかね、考え方を変える、に近いですけど、新しい自分を探すっていうんですか。で、落ち込んだときに対処できるようにとか、もしくは落ち込まないようにとか、そういう方法を身につけることを意識して、この半年ちょっとE（事業所）に通ってて、それが大きなきっかけになったのかなって思ってます」。病気になり、失ったり、捨てたものもあるが、事業所で新しい対処方法やスキルを身につけ、就労に向けて準備していることの語りである。

### (5) カテゴリー5【働くことへの躊躇い】

このカテゴリーは《仕事につけるか不安を抱える》《他者からの評価に揺れる》の2つのサブカテゴリーから構成されている。これらは、働きたい意欲はあるが、実際には働けないことへの不安や焦り、また、過去の失敗体験があることによって、就労をチャレンジすることに不安を感じていることを表している。

### 《仕事ができるか不安を抱える》

「いやあ…正直40になって、なんか…なんか選べないんじゃないかな…っていう不安があるんですよ。だから、働ければいいっていうのが…ありますね」。

働きたくても、年齢や選択肢など、制限されている中で仕事に就けるかどうか不安に感じていることの語りである。

### 《過去の失敗体験に揺れる》

「〇〇からも一切褒められることもなく責められてばかりで、さらにさっき言った通り残業がすごく多くて、あっ、これは自分ダメになるなと、辛いなと思っちゃったんですね。で、辛いなと思ったらほんとに全部が辛くなってしまって、もう残業するのも辛いし、仕事そのもの、人にそんなこと言われたことがないから、今でも

表2 抽出されたコード、サブカテゴリー、およびカテゴリーの一覧

| カテゴリー         | サブカテゴリー        | コード                                    |
|---------------|----------------|--|
| 病いに翻弄された過去    | 破綻した生活への苦悩     | ストレスで心身を崩した体験の語り                       |
|               |                | 病気は自分のコントロールを失う感覚                      |
|               |                | 仕事の辛さが麻痺した感覚                           |
|               |                | 休みもなく仕事を続けることを振り返り無茶と思う                |
|               |                | 仕事で人に喜んでもらえると辛くても苦にならない                |
|               |                | 過去のなんでもできた自分に思いを馳せる                    |
|               |                | 楽しい仕事がボタンの掛け違いで辛い仕事へとかわる               |
|               |                | 歯車が狂うことで坂道を転げ落ちていくような思い                |
|               |                | 悪循環で生活がすべて嫌になる思い                       |
|               |                | 仕事仲間との関係悪化が引き起こす辛さ                     |
|               | 歯車が合わない事態に翻弄する | 思い出すには辛い過去を抱えている                       |
|               |                | 辛い時期は自分が救われた実感がない                      |
|               |                | 親にうつ病の理解が得られず辛い思いを抱く                   |
|               |                | 自分の状態を理解してもらうために親に何とかかわかってもらう努力をする     |
|               |                |  |
| 安心感を得られる他者の存在 | 安心できるスタッフとの存在  | 頼りになる専門職スタッフの存在                        |
|               |                | 安定感があるスタッフで安心して続けられる                   |
|               |                | 専門職の人がいるおかげで今があると思える                   |
|               |                | 信頼できるスタッフがいて安心できる                      |
|               |                | スタッフのサポートで力量が高まるうれしさ                   |
|               |                | 他者から過去の仕事を評価されることをうれしく思う               |
|               | 通じ合える仲間の存在     | 仲が良い人がいなくなることは辛い体験                     |
|               |                | 同じ就労を目指すメンバーとの交流を楽しむ                   |
|               |                | 仕事を通して大変さと楽しさを共有できる仲間との出会い             |
|               |                | 他者から包まれているような安心感を得る体験する                |
|               |                | 信頼できる人とのつながりを大切にする                     |
|               | 無理解な親への苦悩      | 他者に恵まれている感覚をもつ                         |
|               |                | 事業所で他者とのつながりを大切と思える体験をする               |
|               |                | 安心感を得られる人とのつながりを大切にする                  |
|               |                | 豊かな人間関係を築くことで充実した人生を送ることが夢と語る          |
|               |                |  |
| 回復の実感         | 回復した感覚を抱く      | 発病後4年が経ち、良くなっている実感を持つ                  |
|               |                | 安定した病状は安心感につながる                        |
|               |                | 生き生きしていた自分を取り戻した感覚を抱く                  |
|               | 想起しても安定している体調  | 体調が戻ることで、過去の働いた体験を振り返ることができる           |
|               |                | 過去の辛い体験を振り返っても安定していられる                 |
| 新たな挑戦としての就労   | 働くことへの意味づけ     | 働くことの楽しさを実感する                          |
|               |                | 働くことの意味づけを自分なりにもつ                      |
|               | チャレンジとしての試み    | 新たな就労へのチャレンジ                           |
|               |                | 長く働き続けることを目標とする                        |
|               |                | 自分なりにハードルを課して、頑張ってみる                   |
|               | 新たなスキル獲得       | 新たな自分探しのチャレンジを意識して試みる                  |
|               |                | 自分で意識して活動をコントロールしようと試みる                |
|               |                | 人とのコミュニケーションを課題と感じつつ、新たな力をつけたいと願う      |
| 働くことへの躊躇い     | 仕事につけるか不安を抱える  | 身についた対人スキルを仕事で活用できるよう期待する              |
|               |                | 働かないでいることの焦り                           |
|               |                | 年齢から働けるのかと不安を感じる                       |
|               |                | 両親のためにも働かなければとの思いを抱く                   |
|               |                | 働いていないことに甘えを感じると同時に焦りを抱く               |
|               | 過去の失敗体験に揺れる    | 仕事での評価が下がることで自己評価が下がる                  |
|               |                | 思いよもらない他者評価に戸惑う                        |
|               |                | 低い他者評価に自己の価値を失う                        |
| 自らの可能性への期待    | 自分らしい生活の立て直し   | 仕事だけの生き方から今の自分を大切するという生き方への変化          |
|               |                | 仕事は仕事として楽しみ、プライベートはプライベートで楽しむことを大事にしたい |
|               |                | 自分で意識して活動をコントロールしようと試みる                |
|               | 身につく能力を活かす     | 新たなスキルを身につけるための方策を考える                  |
|               |                | 働くことは病気の克服にもつながるのではとの思い                |
|               |                | 就労支援の体験はいろんな力がつく体験と思える                 |
|               | 仕事で認められることへの期待 | 就労体験は集中力を高めるのに役立つ                      |
|               |                | 人に喜ばれる仕事に楽しさを感じる                       |
|               |                | 仕事で人に喜んでもらえると辛くても苦にならない                |
|               |                | 仕事の成果を認められる体験をする                       |
|               |                | 親の面倒から離れ、仕事で自立することを願う                  |
|               | 自分の可能性を信じる     | 仕事は高望みよりも、今出来ることを大事したい                 |
|               |                | まずは仕事をするを目的とする                         |
|               |                | 事業所の業績に期待を持つ                           |
|               |                | 劇的に変わっていくことで自分の可能性に気づく                 |
|               |                | 強みの可能性を信じる                             |

辛いんですよ。仕事しようとするそんなこと考えちゃう…。過去の失敗体験があるためこれからの仕事に影響するのではないかという不安の揺らぎの語りである。

#### (6) カテゴリー6【自らの可能性への期待】

このカテゴリーは《自分らしい生活の立て直し》《身につく能力を活かす》《仕事で認められることを期待する》《自分の可能性を信じる》の4つのサブカテゴリーから構成されている。

##### 《自分らしい生活の立て直し》

「そういった共同作業とか必要な人に馴染む練習をしたり、その上で就職活動をするような施設に一時期、家からとにかく出る練習をしようということで、出来るだけまめに家から出る練習をしようということで、通っていたときがあって、自分でやってみたり、それを試したり、自分のやり方だね。病気を抱えつつも、いろんな方法を試し、生活を立て直していることの語りである。

##### 《身につく能力を活かす》

「やっぱり僕の中で課題は、同じ職場の中でのコミュニケーションとかがうまくなかったのかなっていうのがちょっとあって、それでやっぱり SST にすごく熱心に参加させてもらったんですよ。なんで、最近ではスタッフの方にも“すごく SST とか有効に活用できてるよね”みたいに褒められて、おだてられて、でもうまくできるようになって活かしていけたらってやっぱり SST がすごく役に立っているかなって思いますよね。身につくのかなーとか思いながら、それで、それを今後就職した上で活用できれば、前みたいな失敗は繰り返さないのかな、とか思ってみたりしてますね。事業所に通いつタップに見守れながら、身につく能力や強みを活かそうとする思いの語りである。

##### 《仕事で認められることへの期待》

「(過去の仕事)で、売り上げもそこそこ上がるようになって、そしたらそれを認められてまた昇進して…それでこう、(中略)だからそういう仕事して、みんなにわかってもらったらいいなって思って」。障害を抱えていても仕事でも認められたいと期待する語りである。

##### 《自分の可能性を信じる》

「まずここに来て、自分の弱さっていうんですか、そういうのを強めていきたいなと思っています。あの、作業してて、まず集中力がついたっていうのがひとつですね。できるようになったっていうか、できるっていうか、できたっていうか、思ってた以上にできるんじゃないかって。事業所に通所することで、自分の弱点や不十分

なところを強化し、新たな自分の可能性に対する語りである。

### 3. 6つのカテゴリーの関連について

本研究の目的である就労への思いをリカバリーの観点から検討したところ、6つのカテゴリーを以下のストーリーラインとして導くことができた。

彼らの発病は【病いに翻弄された過去】としてあり、働くことや生活が思い通りにならない状況であった。しかし、それは時間とともに変化し、苦悩を抱えつつも事業所に通所するなかで、スタッフに支えられている実感や同じ障害を持っている人との交流から【守られていると実感できる他者の存在】に気づき、【回復の実感】を得ることができていた。彼らは働くことを自らの【新たな挑戦としての就労】と位置づけている一方で【働くことへの躊躇い】に不安を感じていたが、それでも彼らにとって働くことは【自らの可能性への期待】するものであった。

## IV. 考察

ここでは、まず精神障害者の病い体験について述べ、次に、他者との関係の中で働くことへの思いや意識が高まることについて論じる。

### 1. 病い体験の理解

我が国では入院中心の治療から地域ケアへのパラダイムシフトに伴い、障害者の地域生活を支えるための支援活動や福祉サービスが充実してきている。確かにハード面は整いつつあるが、障害を持つ人の地域生活を考える上で本人自身の主体性や主観を抜きには語れない。リカバリーとは主体的な体験を通して、人生の意味を作り出すことであり、彼らが働くということがどのような意味があるのかを理解せねば、本当の意味で彼らの就労支援とはならない。

本研究で、抽出されたカテゴリー【病いに翻弄された過去】は、病勢が強い中では主体性が揺らぎ、彼らはどうすることも出来なくなってしまう事態であった。それが、うつ病であろうとパニック障害であろうと彼らの生活や生き方そのものを脅かすことには変わらないのである。結果として、病いは仕事や家庭、友人など大切なものを奪ったり、失ったり、追いやったりするものであった。黒髪<sup>(16)</sup>は精神疾患を体験した人の退院後の生活について、病気をもらったことによる体験の意味付けするこ

とが今の生活を受け入れる要因になり、失敗の体験はリカバリーのプロセスにおいて意味があるものであることを援助者が理解し、当事者へ有意義な体験であったことを認識できるような支援の必要性を述べている。治療やケアを受けることで生物学的な回復を辿るが、彼らの病い体験はそれぞれの人生を歩む生活の主体者として意味あるものとして理解した上で援助することは非常に重要なことである。それは、病気や障害を強調することではない。彼らが病い体験をくぐり抜け、今があることを真摯に受け止めた上で支援していくことで、彼らは喪失感や絶望感を抱えていても、未来への希望や働くことへのモチベーションを保ち、リカバリーすることができるのである。

## 2. 他者との関係の中で働くことへの思いが高まる

藤野<sup>(17)</sup> はリカバリーに関連して、一貫した姿勢で関心を示し支えてくれる他者が存在することは、対人的な安全で安心できる体験を得ることとなり、他者への信頼を回復する機会になると述べている。本研究の【守られていると実感できる他者の存在】は、先行研究のリカバリーの知見を支持するものであり、サブカテゴリー《安心できるスタッフの存在》はスタッフの存在や働きかけによって安心感を得ていたことが語られていた。また通所するメンバーのことを《通じ合える仲間の存在》として捉えていた。事業所の目的は当事者の就労を目指し、スタッフの専門的な介入や支援を通してメンバーの就労を支えている。一方で通所するメンバーは働くことを共通の目的とし、通所してくる。メンバー同士の交流は、同じ精神障害の経験者として、その苦悩や辛さ、あるいは協同作業を通じての達成感、満足感を共有するができ、相互に還元しあうことが可能になる。岡本<sup>(18)</sup> らによると、「安心できる居場所」や「通じ合える仲間の存在」の守られた環境のなかで、人を助けたり、助けられたりというピアサポート的な力動が作用し、同じ問題を抱える仲間が支え合うことによって回復への希望とつながると述べている。本研究でも同様に、本人自身が病気からの回復の実感とスタッフからの支援、そして当事者同士の互惠的な循環が相まって、彼らの就労への希望や意識が高まっていくことが考えられた。彼らが過去に大切なものを失ったり、捨てざるを得なかったとしても、他者との相互作用から必要とされているという実感に支えられることで、就労を【新たな挑戦としての就労】として意識することができると考えられる。彼らの病い体験によ

る挫折や失意は計り知れない。それでも彼らは、安心できる人の環境や回復の実感に支えられ、挫折を力に変えていこうとする試みや自分なりの方法で対処しようとしていた。再発によって、仕事や日常生活上の失敗や挫折は更なる試練を与えるかもしれない。その度に、また働けるだろうか、この年になって大丈夫だろうか、親の面倒を見たいか働けるだろうか【働くことへの躊躇い】を生むであろう。関谷<sup>(19)</sup> は、社会の一員であるという実感は自分が他者から必要とされているという自己存在への価値や自己信頼感を支える。それがあからこそ喪失感を抱え、いままでの人生や描いていた将来展望への未練を抱えながらも、障害とともに歩み、新たな将来展望を見いだしていけるのだらうと指摘する。確かに、彼らは対人関係においてストレスを感じやすく人づきあいが苦手なものも多く、必要以上に苦悩を抱え込み、働くことへの躊躇いや戸惑いを抱くひともし少なくない。だからこそ、安全感や安心感を基盤とした関係が必要なのである。彼らが再挑戦することを可能にするのは安全な環境で、さらに承認されることの期待感、充実感の体験が、新たな循環を生み、【自らの可能性への期待】を持つことが可能になるのである。身近な存在である事業所スタッフの程よい距離の中で過ごすことは、彼らが対人関係の中で傷つき体験を癒しながらも前に進むことを可能にすると思われる。うつ病やパニック障害など、その疾患や障害は異なるが、いかなる場合であろうと彼らは安全感を得ることで成熟した人間関係をもてるようになるのは変わらない。

その道筋は簡単ではないが、将来の目標や希望をもつことで、障害者が地域で暮らすことの原動力になることが、本研究でも確認された。すべての障害者にとって、働くことがリカバリーではない。しかし、働くことを通して、自らの可能性に希望を抱きつつ、自分の生き方を模索しながら自分の人生の舵取りが可能になるといえる。その際には、他者の存在や関係が大きな役目となることが示唆された。

## 結論

精神障害者の就労への思いは、他者の存在が大きく影響し、周りの人との相互作用の中で高まっていくと考えられた。彼らの病気や障害を視野に入れ、揺れながら自分で立ち直ろうとするプロセスを入院時から共に考えながら支援していくことが本研究から見てきた。

## 今後の課題

本研究で調査した事業所は就労移行支援事業所で、通所者の就労を目指していることから、対象となった人々も就労の意識は高い。このため、リカバリー概念に近い結果になったと思われるが、地域で暮らす精神障害者の代表的なものではないことを留意しておく必要がある。また、障害もそれぞれ異なっており、その特性を加味していないため、今後、対象者を増やしたり、障害別の検討が必要になると思われる。

さらに、今回は施設の特徴やスタッフの考え方や施設内のプログラムとの関連などは考慮には入れていないことも今後の課題として上げられる。

## 謝辞

本研究にてインタビューにご理解、ご協力いただきました通所者の皆様に厚く御礼を申し上げます。また、インタビューの機会や場所の提供を頂きました就労移行支援事業所の代表者、およびスタッフの皆様にも重ねてお礼申し上げます。

## 引用文献

- (1) Deega PE Recovery ,The Lived experience of rehabilitation Psychiatric Rehabilitation Journal . 1988, 11 (4) , 10-19.
- (2) Anthony WA.Recovery from mental illness, The guiding vision of the mental health service system in the 1990s, Psychosocial Rehabilitation Journal, 1993, 16 (4) , 521-538.
- (3) Mark Ragains (2002) A Road to Recovery/前田ケイ (訳) リカバリーへの道, 金剛出版, 2005.
- (4) 厚生労働省, 平成 22 年障害者雇用状況の集計結果 <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000000v2v6.html> (閲覧日 2016 年 5 月 15 日)
- (5) 厚生労働省, 平成 24 年障害者雇用状況の集計結果, <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000002o0qm.html> (閲覧日 2016 年 5 月 15 日)
- (6) 厚生労働省, 平成 27 年障害者雇用状況の集計結果, <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000105446.html> (閲覧日 2016 年 5 月 15 日)
- (7) 大崎瑞穂, 大西アリナ, 大井美紀, 地域で生活する精神障がい者のリカバリーに関する要因分析, 精神科看護, 42(1), 2015, 57-66.
- (8) 小田倉典子, 精神障害者における福祉的就労から一般就労へと向かう動機づけに関する質的研究, 社会福祉士, No20, 2013, 25-33.
- (9) 岩崎弥生, 浅田澄子, 作業所利用中の精神障害者の生きがい, 千葉大学看護学部紀要, No. 21, 1999, 9 - 16.
- (10) 國方弘子, 中嶋和夫. 統合失調症患者の社会生活技能と自尊感情の因果関係. 日本看護研究学会雑誌, 29 (1), 2006, 67 - 71.
- (11) 中村百合子, 山崎登志子, 糠信憲明, 大沼いづみ. 慢性統合失調症患者の首尾一貫感覚 (Sense Of Coherence) の特徴とその関連要因. 日本看護研究学会雑誌, 31 (4), 2008, 41 - 49.
- (12) 畑下博世, 川井八重, 坪倉繁美, 河田志帆, 笠松隆洋, 鈴木ひとみ, 西出りつ子. 精神障害者の地域生活支援に向けた保健所の役割, 日本健康医学会雑誌, 22 (4), 2014, 287-293.
- (13) 野中猛, 図説リカバリー医療保健福祉のキーワード, 中央法規, 2011.
- (14) 野中猛, 心の病 回復への道, 岩波新書, 2012.
- (15) 厚生労働省 障害者の就労支援対策の状況 <http://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/service/shurou.html> (閲覧日 2016 年 5 月 15 日)
- (16) 黒髪恵. 精神疾患を持つ人の退院後の生活が変化していくプロセス. 日本精神保健看護学会誌, 22 (2), 2013, 21-30.
- (17) 藤野清美. 慢性統合失調症患者の地域生活の定着にむけた意思決定過程. 日本精神保健看護学会誌, 2014, 23 (1) , 2013 21-30.
- (18) 岡本隆寛, 広沢正孝, 四方田清, 松本浩幸, 就労継続支援 B 型事業所を利用する統合失調症患者のリカバリー参加に影響する要因, 医療看護研究, 12 (1), 2015, 35-43.
- (19) 関谷真澄. 「障害との共存」の過程とその転換点: 精神障害を抱える人のライフストーリーからみえてくるもの. 社会福祉学, 47 (8), 2007, 84-97.